

京都市京セラ美術館
Kyoto City KYOCERA Museum of Art

鬼頭健吾

The Triangle

Kito Kenjo
Full Lightness

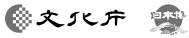
鬼頭健吾：Full Lightness

2020年5月26日（火）－9月6日（日）

京都市京セラ美術館「ザ・トライアングル」

主催：京都市京セラ美術館開館記念イベント実行委員会（京都市、京都新聞、毎日新聞社、MBS）

協力：パナソニック株式会社 ライフソリューションズ社、rin art association

 令和元年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業

* 当館のリニューアルオープンに合わせて「北西エントランス」と「光の広間」でも特別展示同時開催

pp. 4-7 《ghost flowers》2019 年 北西エントランスでの展示風景、2019-20 年

pp. 8-13 「鬼頭健吾：Full Lightness」 ザ・トライアングルでの展示風景、2020 年

pp. 22-24 《untitled (hula-hoop)》2020 年 光の広間での展示風景、2020 年

Kito Kengo: Full Lightness

May 26–September 6, 2020

The Triangle, Kyoto City KYOCERA Museum of Art

Organizer: The Kyoto City KYOCERA Museum of Art Opening Events Executive Committee

(The City of Kyoto, The Kyoto Shimbun, The Mainichi Newspapers, Mainichi Broadcasting System)

Production Support: Life Solutions Company, Panasonic Corporation, rin art association

* Special exhibits have also been installed in the Northwest Entrance and Atrium in conjunction with the Museum's grand reopening.

pp. 4-7 *ghost flowers*, 2019 Installation views at Northwest Entrance, 2019-20

pp. 8-13 Installation views of the exhibition, *Kito Kengo: Full Lightness* at The Triangle, 2020

pp. 22-24 *untitled (hula-hoop)*, 2020 Installation views at Atrium, 2020

「ザ・トライアングル」について

「ザ・トライアングル」は当館のリニューアルオープンに際して新設された展示スペースです。京都ゆかりの作家を中心に新進作家を育み、当館を訪れる方々が気軽に現代美術に触れる場となることをねらいとしています。ここでは「作家・美術館・鑑賞者」を三角形で結び、つながりを深められるよう、スペース名「ザ・トライアングル」を冠した企画展シリーズを開催し、京都から新しい表現を発信していきます。

About “The Triangle”

“The Triangle” is a space that is newly created on the occasion of the renewal opening of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art. Our aim is for it to become a venue to nurture emerging artists, centered on artists associated with Kyoto, and to provide an opportunity for museum visitors to experience contemporary art. In order to connect the “artist, museum and viewer” in a triangle and deepen their connection, we will use this space to host a series of special exhibitions bearing the name “The Triangle” as we set out to present new artistic creations from Kyoto.

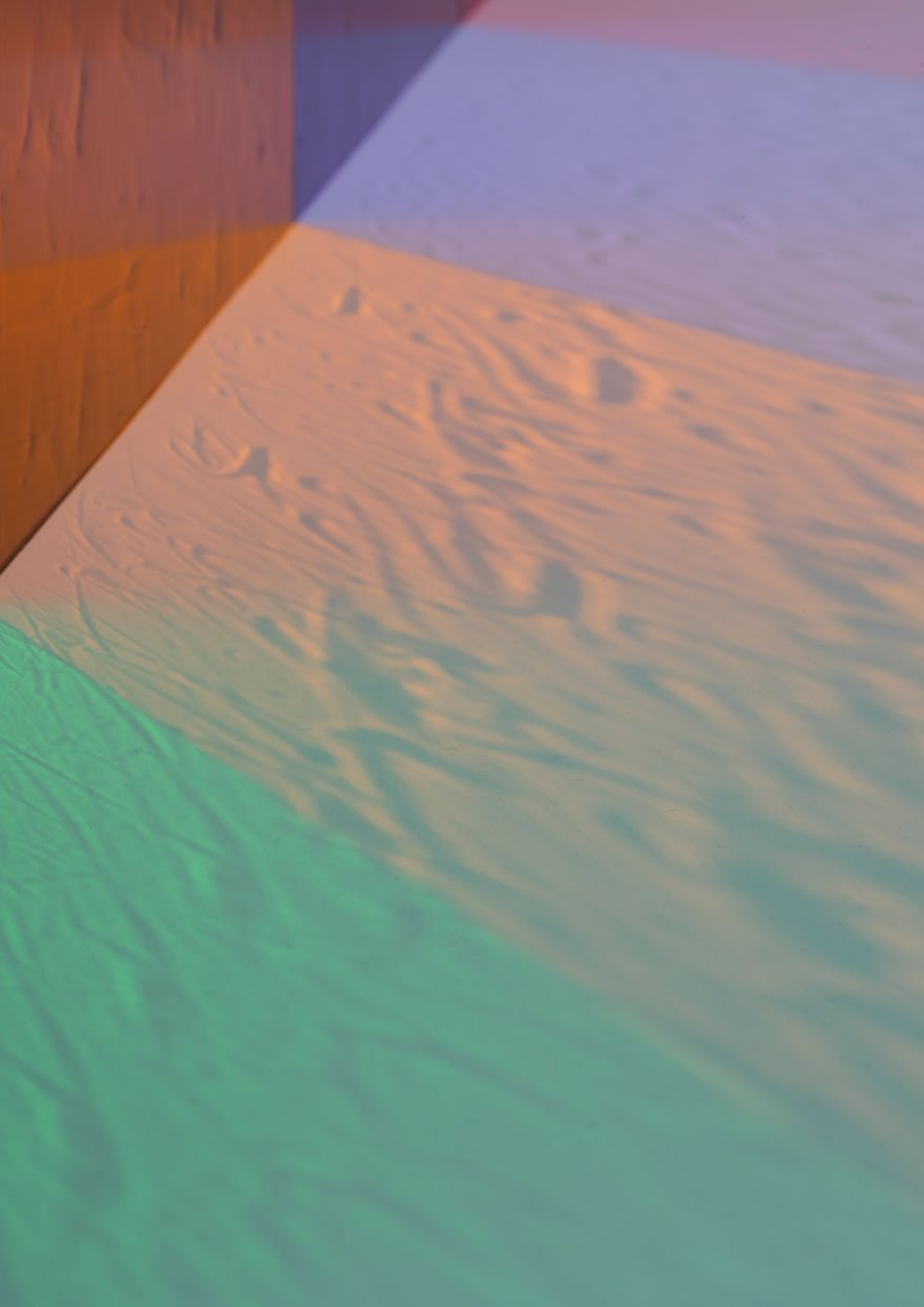






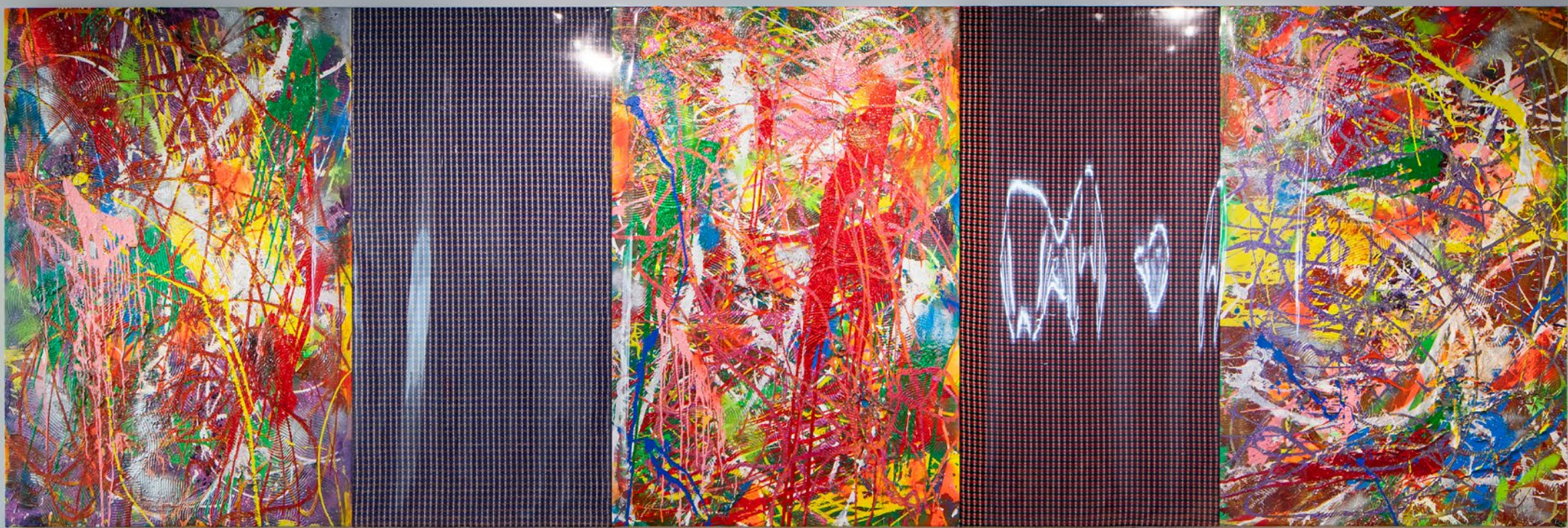




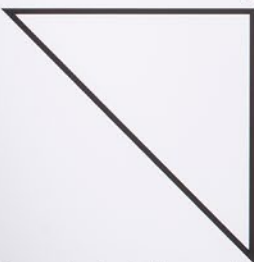








Kito Kengo
Full Lightness



鬼頭健吾

時間 10:00～13:00 見学団体（1名以上の場合）観覧無料
主催 東京都立中央図書館常設展示コーナー 実行委員会（京都市、京都市議会、毎日新聞社、MBS）
協力 パナソニック株式会社、サイプレス・コミュニケーションズ社、rta association
◎大ハル◎ 令和元年度日本館を支援する文化資源コネクトプロジェクト事業

「*ザ・シグナルマン*」について

「*ザ・シグナルマン*」は、日本映画界の巨匠・小川正と「闘」って戦った大団長の傑作です。激動の戦後の社会やその社会意識を表現し、労働者にも市民意識にも目を向け、戦後の日本をさらけ出した傑作といわれています。ここで、小川正・高橋貞一・長瀬喜伴・大杉栄の4人が、この作品でそれぞれの人生の、キーマンと、*ザ・シグナルマン*と対話し、社会のキーマンと戦った、と描かれた1人1人の人生が描かれています。

about "The Signalman"

"The Signalman" is a story that a work made not only because of the internal struggle of the Kurosawa Ki KOCHEI Master but also. One who is a Japanese cinema's greatest director, Kurosawa Ki KOCHEI Master, and a symbol as a representative for modernity, workers, citizens consciousness, etc. In order to describe the "Social Awareness and desire to change the society" and to express their conviction, we will use the spirit that is a source of spirit (ambition) behind the work "The Signalman" and we will try to analyze not only cinema, but also human.



アンステールな cosmos

野崎昌弘

当美術館には「北西エントランス」として新たに造られたガラス張りの三角形の建物がある。そのガラス面は、現在¹、不定形に切り取られたさまざまな半透明のカラーシートやミラーシートによって覆われており、建物内部の床面には100円ショップで買えるような無数の手鏡が敷き詰められている。

天気の良い日中は自然光がカラーシートを通して建物内の壁に色彩豊かな光の絵を投影し、手鏡に反射した色の光は壁や天井に淡くランダムな色面を映し出す。夜は京都市内で取材したという咲き乱れる花の映像を床面の手鏡にプロジェクションし、それがランダムに反射してただただ「揺れる色味」として抽象化された光の断片となり、やはり壁と天井に映し出される。屋外の暗がりの中でこのガラスの建物だけがまるで生命を持つ発光体のように純度の高い「揺れる色味」となって独特な存在感を放つ。これが鬼頭健吾のインスタレーション作品《ghost flowers》の京都バー

ジョンである。

外からこれを見たときは、ミラーシートには自分の像や背景も映り込む。カラーシートを通した内部の光景、手鏡に反射した光などと、鑑賞者はさまざまなレイヤーの断片情報をいっぺんに受け取ることになる。それぞれの色や対象物に意味は見出せない。それはちょうど咲き乱れる花の色が私たちの視覚を通して何色に見えるかを花が頓着しないように、夜空の星の並び方を点線で辿って星座を見出すのは星の意志ではなく私たちの意識であるように、これらの「揺れる色味」は我々の視覚受容体を通して、ただそこに揺れながらあり続ける。

この無意味に拡散する不定形な小宇宙、すなわち cosmic space には、自然光や撮影した映像の反射、鑑賞者の立ち位置など計算し尽くせない偶然の要素を多分に含みながら、それでも「cosmos」とも呼びうるある調和がある。あるいは不可知な「cosmos」という想念を我々が無意識的に構成するということであろう。

そのときこれらの「揺れる色味」は初めて作品として成立する。鬼頭の構想力のクオリティがここに現れている。

鬼頭健吾は日常的な物品、特に安価な大量生産品

を用いて空間構成とインスタレーションを行う現代美術作家である。ゼロ年代作家の中でもとくに視覚の異化効果により観ること、あるいは観ることで眩惑されることを集中して問うてきた作家である。鬼頭は光の透過や反射による視覚的效果を最大化する実験的な空間構成により、展示空間を力強い磁場を持つ空間に変貌させる。このたび当館の「光の広間」に展示された、代表作でもある大量のカラーフラフープを組み合わせたインスタレーション《untitled (hula-hoop)》は、カラフルな量塊として圧倒的な存在感がある。しかも物質としては極めて軽い隙間だらけのものが空間を占有することによって、鑑賞者の視覚を眩惑させる。

鬼頭は作品のタイトルにしばしば「cosmic」「star」「galaxy」²など宇宙に関わる言葉を使ってきた。そうして鬼頭はギャラリーのホワイトキューブやキャンバスの矩形にさまざまな日常的な材料を用いながら、日常の延長とは切り離された無限空間を作り出してきた。日常的な物質の構成と光や陰や奥行きのある空間で、鑑賞者として作品と対峙することにより生じる観る者と作品とのコレスポンドは、やはり瞬間的な非日常としての「cosmos」、あるいは小さな不定形の宇宙＝cosmic spaceを生起させずにはおかない。

もっとも、「揺れる色味」の眩惑と「cosmos」の想起とは離れて、作家の制作態度はあくまでマテリアリストティックに視覚体験と空間構成を探究し続けることにある。作家の関心が色彩と空間構成にあり、量感やレイヤー、それに光が加わり重層的な視覚体験を促している。作家はそうした視覚体験を常に自身の絵画論に立ち戻りながら考察しているという³。

彼の絵画作品や立体作品は、近作になればなるほどアンステーブルな要素に満ちてくる。フレームへのこだわり（オブセセッション）がある一方で、常にフレームから外れたものへの志向を強く持つ⁴鬼頭の感覚的な空間構成力と思考とのせめぎ合いから彼の作品は生まれてくる。

新設のスペース「ザ・トライアングル」は北西エントランスの直下であり、インスタレーション作品《ghost flowers》と緩やかに連動するような展示が構想された。

ここで展覧会のタイトルについて触れておきたい。個展のタイトル「Full Lightness」のlightnessという語は「明るいこと、明るさ」と「軽さ」の両方の意味を持ち、タイトル「Full Lightness」を仮に訳すと「色と光に満ち満ちた究極の軽さ」とでもなろう。

これは無意味さをたたえながら「歩きながら作品群の中に身を置く体験」⁵を志向する作家が、ザ・トライアングルでの展示のために名付けたタイトルであり、また、同時期開催の北西エントランスの《ghost flowers》、本館・光の広間の《untitled (hula-hoop)》をも包摂した3カ所での展示全体のタイトルでもある。

ザ・トライアングルでメインとなる作品は、キャンバスと織布の幅6m近くに及ぶ5点連作の平面作品《cartwheel galaxy》(2020年)である。キャンバスにアクリル絵具をそのままドリッピングしたり、スキージで延ばして波紋を作ったり、さらには半濁きのアクリル絵具の皮膜が偶然にヨレたのをそのままに、その上から積層的に絵具やスプレーを塗り込めて、さらにはキラキラするラメ、ガラスの粒などを振りまいて制作された新作である。絵画史的には抽象表現主義の何代目かの嫡子という言い方もできるであろう。ただし鬼頭はそうしたことに頓着する様子はあまり見せず、幾重にも重なるレイヤーを持つキャンバスと既製のエスニックな織布との接続を面白がり、壁にインストールした後、最後に透明のビニール・シートを掛けることで、これで完成した、と

悦に入っていた。この時の鬼頭の照れ笑いと満足げな表情は、この作家が本当にしたかったこととそれが果敢な実験であったことの両方を同時に示していたはずだ。

他に三角形のフレーム2つに仕込まれたやや暴力的な形態と光量を持つLEDライトの立体造形物、ホウキを2つつなぎ合わせてモーターで回転させるおよそ無骨と言うしかないモビール作品《rolling branch》、同じくモーターでゆっくり回転するカラフルな雨傘の作品および床のそこここに点在するメッキ塗装をした石、これらを覗き込むように台座に設えられた4色の板ガラス。それらがホワイトキューブならぬ三方を白い壁で囲まれて一方が開放されているそれほど広くはないギャラリーの中で1つの小宇宙のようなインスタレーションとして構成されている。そして前年の新作である屋外用電飾看板のアクリルカバーにペイントした《ghost sign》がギャラリーの外側の通路に設置されている。何かを指示するサインとしての役割を剥奪されたまま「電飾サイン看板」ならぬ何ものかとしてただ発光している。以上がザ・トライアングルでの展示の構成要素である。

ここには、どこまでも意味の構成を拒むような小

宇宙という意味で、鬼頭の作品のエッセンスがよりストレートに現れている。なによりギャラリーに入って壁面の大作に近づいて行こうにも空間の中を頭上の回転するホウキと足元の星くずのようなメッキ塗装をした石に気を取られながら歩き回らねばならず、「揺れる色味」に眩惑されながらより純度の高い無意味だけが抽出されたような視覚体験に没入することとなる。鑑賞者はゆっくりと歩き回りながら鑑賞に最適な安定した立ち位置を見出そうとするものだが、そうした場所は予め用意されているはずもなく、アンステーブルで居心地の悪いまま、空間と揺れる作品、移動する自分自身の関係を探り当てようとぐるぐるとさまようことになる。

そして、このステーブルな立ち位置を求めながらアンステーブルな居心地の悪さを抱え続け、空間を経めぐりながらその意味をいくつかの言葉に置き換えようと思念の糸を手繰りながら、人はついにたどり着くべき着地点を見出せぬまま途方にくれることになる。そこには、ただゆらゆらとしたcosmos（調和）がある。

（のざき・まさひろ／京都市京セラ美術館キュレーター）

註

- 1 2020年4月の本稿の校了時点。プレオープンの2019年12月21日から展示。
- 2 《cosmic dust》《star burst》《active galaxy》《cartwheel galaxy》など。それぞれがシリーズとして数年にわたって制作されている。
- 3 筆者による鬼頭へのインタビュー。
- 4 同上。
- 5 同上。

Unstable Cosmos

Nozaki Masahiro

Curator, Kyoto City KYOCERA Museum of Art

Forming the Northwest Entrance to the Kyoto City KYOCERA Museum of Art is a newly built triangular structure with glass walls. At present, these glass surfaces are covered with myriad translucent color sheets and mirror sheets cut into indeterminate forms, while the floor inside the building is covered with countless hand mirrors of the type you can buy at a 100-yen store.¹

On fine days, light from outside passes through the color sheets, projecting colorful light images on the walls inside the building, while colored light reflected by the hand mirrors casts faint, random color planes on the walls and ceiling. At night, images shot around Kyoto of flowers blooming in riotous profusion are projected onto the hand mirrors on the floor, and are randomly reflected to form fragments of light in the form of flickering colors that are similarly cast on the walls and ceiling. Amid the darkness outside, the highly saturated flickering colors give this glass building alone a peculiar presence, like a luminous body with a life of its own. This is the Kyoto

version of Kito Kengo's installation piece, *ghost flowers*.

In viewing the installation from the outside, one's own image and background are reflected in the mirror sheets. The viewer takes in all at once not only the scene inside as seen through the color sheets and the light reflected off the hand mirrors, but also various layers of fragmentary information. Yet they cannot find meaning in the individual colors or objects. Just as the flowers blooming in riotous profusion are unconcerned about what colors they take on as seen by us, and just as detecting constellations in the arrangements of stars in the night sky by connecting them with dotted lines is not the will of the stars but something we do consciously, these flickering colors appear to flicker continuously via our visual receptors.

Within this miniature universe of indeterminate form that spreads apparently without meaning, which is to say this cosmic space, there is a certain harmony that we can call a "cosmos" despite it incorporating numerous coincidental elements that cannot be fully calculated, such as the reflection of natural light and the projected images, and the positions of the viewers. Or perhaps we unconsciously construct the concept of an unknowable "cosmos."

It is at this moment that the flickering colors first

come into being as an artwork. And it is here that the quality of Kito's imagination is revealed.

Kito Kengo is a contemporary artist who creates spatial compositions and installations using everyday items, and in particular cheap, mass-produced products. Perhaps more so than other artists who began working in the 2000s, he is focused in particular on questioning how we see things, or are dazzled by seeing things, by means of a visual "alienation effect." By creating experimental spatial compositions that maximize visual effects achieved through the transmission and reflection of light, he transforms exhibition spaces into spaces that are possessed of a powerful ambience. Presented on this occasion in the museum's North Wing Atrium, *untitled (hula-hoop)*, his most important work to date made by combining a large number of colored hula-hoops, has an overwhelming presence on account of its colorful mass. Moreover, because objects that are extremely light and dominated by voids occupy the space, the viewer's visual sensation is thrown into confusion.

Kito has often used words pertaining to space, such as "cosmic," "star" and "galaxy," in the titles of his artworks.² At the same time, he has created infinite space removed from people's everyday experiences while employing myriad everyday materials inside the white

cubes of museum galleries and the rectangles of canvases. The correspondence between viewer and artwork, which arises by confronting as viewer an artwork composed of everyday materials in a space with light, shadow and depth, cannot but create a "cosmos," that is to say, a small, indeterminate universe, or cosmic space, as a momentary extraordinariness.

However, separately from dazzling viewers with flickering colors and evoking a "cosmos," Kito's creative approach entails the constant materialistic pursuit of visual experiences and spatial compositions. His interest lies in colors and spatial composition, sense of mass and layers, to which he adds light, thus prompting a multilayered visual experience. Kito himself says that he is constantly inquiring into these experiences while returning to his own theory of painting.³

The more recent his painterly and three-dimensional works get, the more they become filled with unstable elements. While on the one hand he is obsessed with frames, on the other he always has a strong orientation toward things removed from frames,⁴ as a result of which his works tend to be born out of a conflict between the sensual power of spatial configuration and thought.

Directly underneath the Northwest Entrance is a newly established space called The Triangle, and it is here

that an exhibit loosely connected to the new installation *ghost flowers* is displayed.

Here I would like to first touch upon the title of the exhibition. The word “lightness” in the exhibition title “Full Lightness” has two meanings: “the quality being illuminated, or the dimension of color appearing to transmit or reflect more light” and “the quality of having little weight.” In this sense, we could translate the title to mean “the quality of being full of color and light and having extremely little weight.” This is the title Kito came up with for the exhibit at The Triangle and reflects his aspiration for “experiences of walking about and placing oneself inside pieces of art,”⁵ while celebrating meaninglessness. It is also the collective title of the exhibits displayed simultaneously in three locations, including *ghost flowers* in the Northwest Entrance and *untitled (hula-hoop)* in the North Wing Atrium.

The main attraction at The Triangle is the two-dimensional work *cartwheel galaxy* (2020), a series of five canvas and woven fabric pieces measuring nearly 6m across. A new work, it was made by dripping acrylic paint on the canvas or applying it using a squeegee to form wave patterns, after which paint was applied in layers or sprayed over the acrylic paint while it was still semi-dry and wrinkles had formed haphazardly on the

surface. Finally, glitter and glass particles were scattered over the pieces. Here, in art historical terms, perhaps one could describe Kito as an heir to abstract expressionism. However, the artist himself shows little indication of being concerned about such matters, taking delight in the interconnection of the canvases with their multiple layers and the readymade ethnic woven fabric, and looking pleased when they were completed by installing them on a wall and covered with transparent sheets of plastic. The self-conscious smile and satisfied expression that appeared on his face at this time no doubt indicated simultaneously both what he truly wanted to achieve and that it was a bold experiment.

Other works include an LED light sculpture with an almost violent form and intensity of light enclosed within two triangular frames; a somewhat unrefined piece titled *rolling branch* consisting of two brooms joined together and made to rotate with the aid of a motor; a work comprising a colorful umbrella also made to slowly rotate with the aid of a motor; glittering plated rocks that are scattered around the floor; and sheet glass in four different colors installed on a stand through which viewers can look at the above works. These works are organized as an installation reminiscent of a single microcosm within the less-than-spacious, not-quite-

white-cube—only three sides are surrounded by white walls with the remaining side open—gallery. Finally, *ghost sign*, a new work from the previous year consisting of outdoor internally illuminated signboards whose acrylic covers have been painted, is installed in the corridor outside the gallery. Stripped of their function as signs indicating something, these pieces simply emit light as “illuminated non-sign boards.” The above works are the components of the exhibit at The Triangle.

It is here that the essence of Kito’s artworks in the sense of the kind of microcosm that defies the structure of meaning most directly manifests itself. Above all, regardless of how much one may want to approach the large work taking up almost an entire wall upon entering the gallery, one is forced to follow a circuitous route as one’s attention is diverted by the brooms rotating above one’s head and the rocks glittering like stardust at one’s feet, so that one ends up being absorbed in the kind of visual experience in which only meaninglessness of the purest order is educed while one is dazzled by the flickering colors. Viewers tend to slowly walk around as they try to find the optimum stable viewing position, but such a location has not been prepared in advance, and they end up wandering around and around, still feeling unstable and uncomfortable, as they try to determine the

relationship between the space, the flickering works and their moving selves.

Continuing to endure this unstable uncomfortableness while seeking a stable position, spinning threads of thought about the meaning of the space by attempting to apply words while wandering around it, but ultimately unable to discover a landing place, people find themselves at a loss. There, there is but a flickering cosmos (harmony).

1 As of April 2020 when this text was written. On show from the preopening of December 21, 2019.

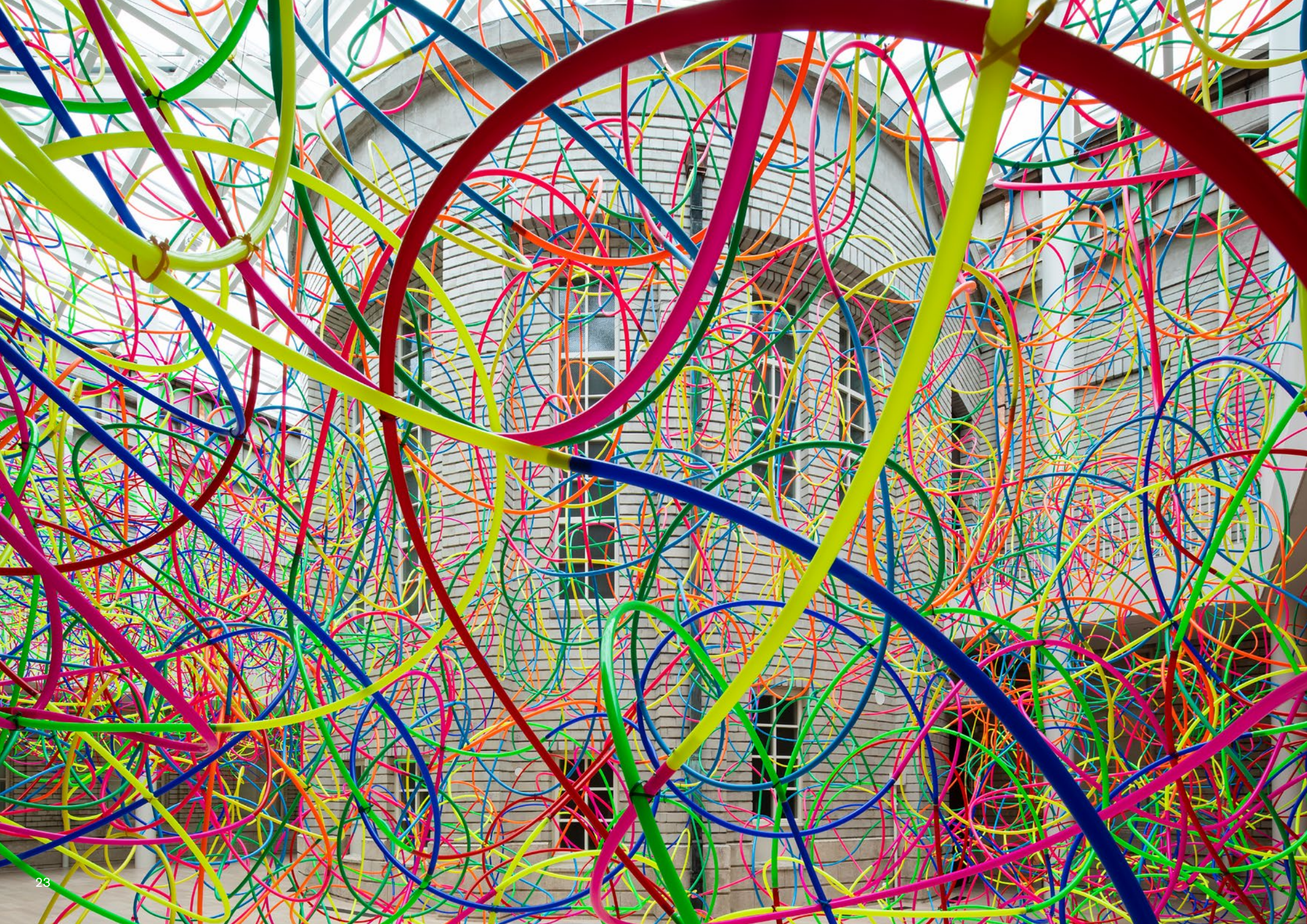
2 *cosmic dust*, *star burst*, *active galaxy*, *cartwheel galaxy*, etc. Each has been created multiple times with the same title over several years.

3 From an interview conducted by the writer.

4 Ibid.

5 Ibid.





京都の美術
250年の夢

The Kyoto City KYOGERA Museum of Art Inaugural Exhibition
250 Years of Kyoto Art Masterpieces



作品リスト

ザ・トライアングル

- ① **《cartwheel galaxy》**
2020年 | キャンバスにアクリル絵具、ラメ、
カラスプレー、砕いたガラス、織布、ビニール
589.0 x 194.0 x 6.0 cm
- ② **《rolling branch》**
2020年 | ほうき、反射テープ、モーター
264.0 x 28.0 x 3.0 cm
- ③ **《untitled》**
2019年 | 石にメッキ塗装
- ④ **《untitled》**
2016年 | 木材、LEDライト、カラスプレー
サイズ可変
- ⑤ **《untitled》**
2020年 | 色ガラス
200.0 x 60.0 cm
- ⑥ **《untitled》**
2018年 | パラソル、モーター
φ132.0 x h84.0 cm (モーターが入った筐体を除く)
- ⑦ **《ghost sign》**
2019年 | 電飾スタンド看板3台、カラスプレー
98.0 x 66.5 x 24.5 cm (1台)
104.5 x 67.0 x 18.0 cm (2台)

北西エントランス

- 《ghost flowers》**
2019年 | ミクストメディア
サイズ可変

光の広間

- 《untitled (hula-hoop)》**
2020年 | カラーフラフープ
サイズ可変

全て作家蔵

List of Works

The Triangle

- ① ***cartwheel galaxy***
2020 | acrylic on canvas, lame paint, spray paint,
shattered glass, fabric, vinyl
589.0 x 194.0 x 6.0 cm
- ② ***rolling branch***
2020 | brooms, reflective tape, motor
264.0 x 28.0 x 3.0 cm
- ③ ***untitled***
2019 | plated rocks
- ④ ***untitled***
2016 | wood, LED light, spray paint
dimension variable
- ⑤ ***untitled***
2020 | colored glass
200.0 x 60.0 cm
- ⑥ ***untitled***
2018 | parasol, motor
φ132.0 x h84.0 cm (excluding motor and its cabinet)
- ⑦ ***ghost sign***
2019 | 3 illuminated signboards, spray paint
98.0 x 66.5 x 24.5 cm (1 of 3)
104.5 x 67.0 x 18.0 cm (2 of 3)

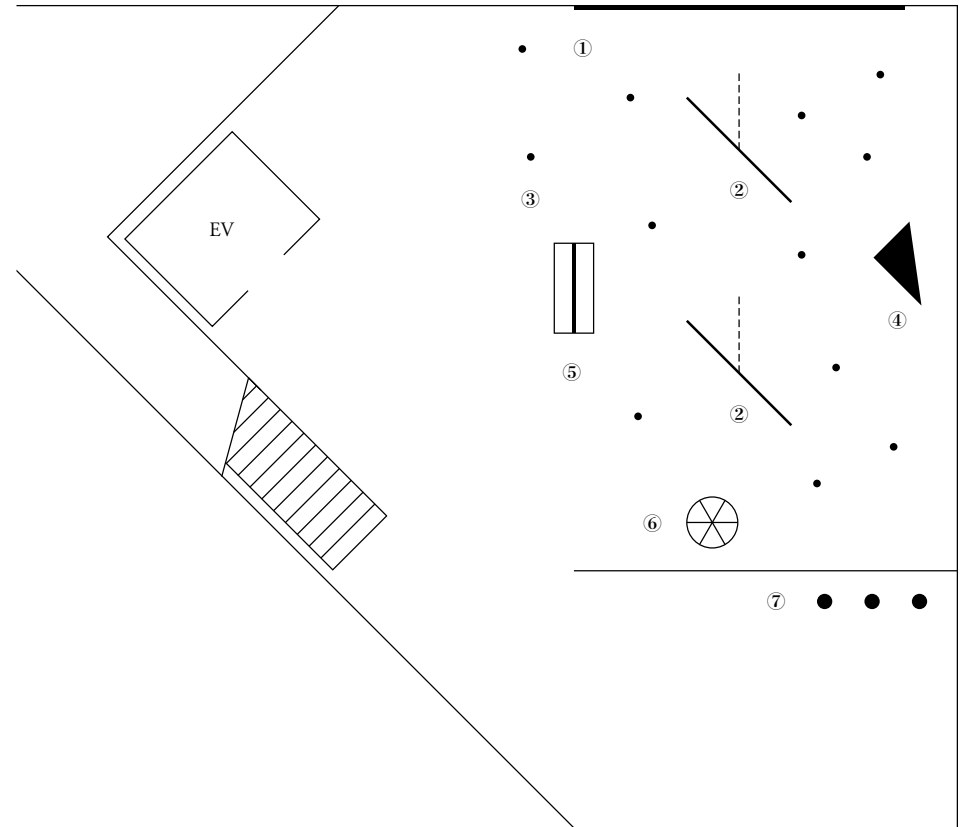
Northwest Entrance

- ghost flowers***
2019 | mixed media
dimension variable

Atrium

- untitled (hula-hoop)***
2020 | color hula-hoops
dimension variable

All works are from the collection of the artist.



鬼頭健吾 きとう・けんご

1977 愛知県生まれ
2001 名古屋芸術大学絵画科洋画コース卒業
2003 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了
現在 高崎市在住、京都芸術大学大学院芸術研究科教授

主な個展

1999 「star maker」アートスペース dot、西春町（愛知）
2003 「粒」モリユウギャラリー（京都）
2004 「cosmic dust」ケンジタキギャラリー（東京）
「quasar」ギャラリー小柳（東京）
2007–08 「MOT × Bloomberg PUBLIC ‘SPACE’ Project」東京都現代美術館（東京）
2009 「flimsy royal」ヒューマンティーズ・ギャラリー、ロングアイランド大学ブルックリン校（ニューヨーク）
2010 「変成態 - リアルな現代の物質性（Vol.7 鬼頭健吾）」ギャラリーα M（東京）
「SIMULACRUM」Wooson ギャラリー、テグ（韓国）
2015 「Reflection 反映」（五島記念文化賞 美術新人賞研修帰国記念）ケンジタキギャラリー（東京）
「Migration 回遊」（五島記念文化賞 美術新人賞研修帰国記念）群馬県立近代美術館 展示室5、高崎（群馬）
2016 「KENGO KITO Interstellar」京都造形芸術大学ギャルリ・オーブ（京都）
2017 「MULTIPLE STAR I-III」ハラ ミュージアム アーク現代美術ギャラリー A、渋川（群馬）
「cartwheel galaxy」rin art association、高崎（群馬）
「YCC Temporary 鬼頭健吾」YCC Temporary、横浜（神奈川）
2018 「cartwheel galaxy」ガトーフェスタ ハラダ本社ギャラリー、高崎（群馬）
2019 「Light in Emptiness」rin art association、高崎（群馬）

主なグループ展

1999 「cosmic flavor」アートスペース dot、西春町（愛知）
2004–05 「日本の新進作家 vol.3 新花論」東京都写真美術館（東京）
2005 「ベリーベリーヒューマン」豊田市美術館（愛知）
2007–08 「六本木クロッシング 2007 未来への脈動」森美術館（東京）
2008 「Twenty」デイズド・アンド・コンフューズド・ギャラリー（ロンドン）
「The Echo」（展示兼企画）ZAIM、横浜（神奈川）
2010 「pig ment」ランズベルガー・アレーの中央食肉処理場跡（ベルリン）
2011 「アーティスト・ファイル 2011 - 現代の作家たち」国立新美術館（東京）
「世界制作の方法」国立国際美術館（大阪）
2012 「一枚の絵の力」ナディッフ・ギャラリー（東京）
「THE ECHO – ALTHOUGH I AM STILL ALIVE」（展示、兼企画）クンストラウム・クロイツベルク
／ベタニエン（ベルリン）

2013–14 「Now Japan; Exhibition with 37 contemporary Japanese artists」クンストハル KAdE、アメルスフォールト
（オランダ）
「Mono-no Aware. Beauty of Things. Japanese Contemporary Art」エルミタージュ美術館、サンクトペテル
ブルク（ロシア）
2014–15 「COSMOS/INTIME La Collection Takahashi」パリ日本文化会館（パリ）
2016 「DOMANI・明日展 PLUS」京都芸術センター（京都）
2018 「六本木アートナイト 2018」メインプログラム、国立新美術館（東京）
2019 「ギホウのヒミツ」高松市美術館（香川）
2020 鬼頭健吾・竹村京「Go back and fetch me out that doodle-do!」フィリップス（東京）
「第7回 子ども絵画展」市原湖畔美術館（千葉）

受賞歴

2003 京都市立芸術大学作品展 奨励賞受賞
2008 第19回（平成20年度）五島記念文化賞、美術新人賞受賞
2019 令和元年度 京都市芸術新人賞受賞

主な収蔵先

国立国際美術館（大阪）、豊田市美術館（愛知）、高松市美術館（香川）ほか多数

Kito Kengo

1977 Born in Aichi Prefecture, Japan
 2001 Graduated from the Department of oil painting, Nagoya University of Arts
 2003 Completed Postgraduate Studies, Kyoto City University of Arts
 Currently resides in Gunma Prefecture, and serves as a professor at Kyoto University of the Arts Graduate School

Selected Solo Exhibitions

1999 *star maker*, art space dot, Nishiharu-cho, Aichi
 2003 *grains*, Mori Yu Gallery, Kyoto
 2004 *cosmic dust*, Kenji Taki Gallery, Tokyo
quasar, Gallery Koyanagi, Tokyo
 2007–08 *MOT×Bloomberg PUBLIC ‘SPACE’ Project*, Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo
 2009 *flimsy royal*, Humanities Gallery, Long Island University, Brooklyn Campus, New York
 2010 *METAMORPHOSIS – Objects Today Vol. 7 Kengo Kito*, gallery α M, Tokyo
 2014 *SMULACRUM*, Wooson Gallery, Daegu, Korea
 2015 *Reflection*, Kenji Taki Gallery, Tokyo [Gotoh Memorial Cultural Award, Most Promising Young Talent Prize, art rookie of the year title training returning home is commemorative]
Migration, The Museum of Modern Art, Gunma [Gotoh Memorial Cultural Award, Promising Young Talent Prize, art rookie of the year title training returning home is commemorative]
 2016 *KENGO KITO Interstellar*, Kyoto University of Art and Design, Galerie Aube, Kyoto
 2017 *MULTIPLE STAR I–III*, Hara Museum ARC Gallery A, Shibukawa, Gunma
cartwheel galaxy, rin art association, Takasaki, Gunma
YCC Temporary KENGO KITO, YCC Temporary, Yokohama, Kanagawa
 2018 *cartwheel galaxy*, Gateau Festa Harada Gallery, Takasaki, Gunma
 2019 *Light in Emptiness*, rin art association, Takasaki, Gunma

Selected Group Exhibitions

1999 *cosmic flavour*, art space dot, Nishiharu-cho, Aichi
 2004–05 *On Flowering Images: Contemporary Japanese Photography*, Tokyo Metropolitan Museum of Photography, Tokyo
 2005 *very very human*, Toyota Municipal Museum of Art, Aichi
 2007–08 *Roppongi Crossing 2007: Future Beats in Japanese Contemporary Art*, Mori Art Museum, Tokyo
 2008 *Twenty.*, Dazed and Confused Gallery, London
THE ECHO [Exhibition and Organization], ZAIM, Yokohama, Kanagawa
 2010 *pig ment*, Zentralviehhofs, Landsberger Allee, Berlin
 2011 *ARTIST FILE 2011: The NACT Annual Show of Contemporary Art*, The National Art Center, Tokyo

Ways of Worldmaking, The National Museum of Art, Osaka
 2012 *Power of a Painting*, NADiff Gallery, Tokyo
THE ECHO – ALTHOUGH I AM STILL ALIVE [Exhibition and Organization], Kunstraum Kreuzberg/Bethanien, Berlin
 2013–14 *Now Japan; Exhibition with 37 contemporary Japanese artists*, Kunsthal KAdE, Amersfoort, The Netherlands
Mono-no Aware. Beauty of Things. Japanese Contemporary Art, The State Hermitage Museum, Saint Petersburg, Russia
 2014–15 *COSMOS/INTIME La Collection Takahashi*, Maison de la Culture du Japon à Paris, Paris
 2016 *DOMANI*, Kyoto Art Center, Kyoto
 2018 *Roppongi Art Night 2018*, Main Program, The National Art Center, Tokyo
 2019 *The Secrets of Techniques*, Takamatsu Art Museum, Kagawa
 2020 Kito Kengo, Takemura Kei, *Go back and fetch me out that doodle-do!*, Phillips, Tokyo
Children painting exhibition, Ichihara Lakeside Museum, Chiba

Awards

2003 Encouragement Prize, Kyoto City University of Arts
 2008 19th Gotoh Memorial Cultural Award, Most Promising Young Talent Prize in Arts Division
 2019 Kyoto City Newcomer Artist Award

Selected Public Collections

The National Museum of Art, Osaka
 Toyota Municipal Museum of Art, Aichi
 Takamatsu City Museum of Art, Kagawa

鬼頭健吾：Full Lightness

〔展覧会〕

野崎昌弘、山田隆行（京都市京セラ美術館）

〔カタログ〕

編集：土屋隆英、水野良美（京都市京セラ美術館）

翻訳：パメラ・ミキ・アソシエイツ（pp. 18–21）

撮影：木暮伸也

デザイン：菊地敦己

発行日：2020 年 7 月 31 日

発行者：京都市京セラ美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 124

www.kyotocity-kyocera.museum

Kito Kengo: Full Lightness

〔Exhibition〕

Nozaki Masahiro, Yamada Takayuki (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)

〔Catalogue〕

Edited by:

Tsuchiya Takahide, Mizuno Yoshimi (Kyoto City KYOCERA Museum of Art)

Translation: Pamela Miki Associates (pp. 18–21)

Photography: Kigure Shinya

Designed by:

Kikuchi Atsuki

First Edition: July 31, 2020

Published by Kyoto City KYOCERA Museum of Art

124 Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8344 Japan

www.kyotocity-kyocera.museum